

井出新氏講演要旨

エリザベス一世の治世下、16世紀後半に花開いた演劇文化において、シェイクスピアという存在はあまりに大きすぎて、彼がいかに孤高の劇作家、超然とした詩人だったかのように考えられがちだが、実際は、ライバル詩人やライバル劇団の擡頭に脅威を感じて心乱れたり、他の劇作家たちと切磋琢磨しながら作風に変化を与えたり、劇団員や書籍商たちと協力しながら作品を作り上げていた。そういう意味では、様々な人々との関わりがシェイクスピアを創り上げたと言えることができる。そこで本講演では1590年代前半に焦点を当て、先ず、シェイクスピアがストレンジ卿一座の人脈ネットワークから頭角を現し、劇作家クリストファー・マーロウや俳優エドワード・アレンとともに「マーリン一派」を形成していた可能性を作家ロバート・グリーンの散文作品から探った。また、リチャード・フィールドやエドワード・ブラントなどの書籍商との交流関係を洗い出し、シェイクスピアによる『ヴィーナスとアドニス』（1593年出版）とマーロウによる『ヒアローとリアンダー』（1592～93年頃執筆）の競作プロセスを考察した上で、『夜の影』出版（1594年）による「マーリン一派」のライバル詩人ジョージ・チャップマンの鮮烈なデビューが、シェイクスピアのその後の詩作に大きな影響を及ぼしたことを、ソネット86番から読み取った。こうして作家や劇団、文壇のミクロな世界を数年間という短い単位で覗いてみると、シェイクスピアだけでなく、同時代作家や書籍商、役者たちの織りなす複雑で豊かな関係性が見えてきて、作品という小さな世界がもつ豊かさにも目が開かれる。シェイクスピア研究の楽しさとはそんなところにあるのだ。

